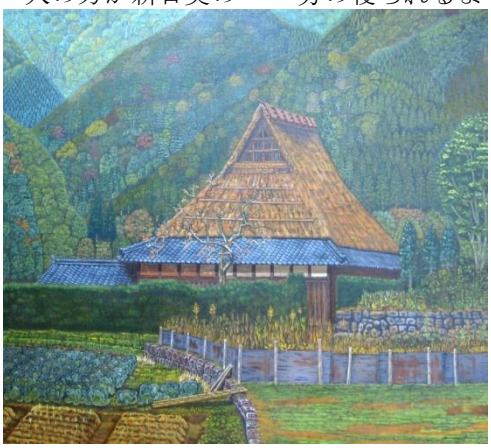
ときどき旅　ところによりスケッチ　浅野直正

勤めていた頃は仕事で精一杯で、絵を描くなど思ってもみなかったことですが、定年になり、暇になってしまいましたので、とりあえず埼玉県がやっていた「いきがい大学」の美術工芸科に１週間に１度、２年間、行って遊んでもらおうと思いました。

縁とは不思議なもので、その中の一人の方が新日美の方を知っておられたので、絵の指導をしていただいたのを契機に、結果として新日美に入会させていただくことになりました。多大なご指導をいただき感謝しております。



スケッチにグループで行くようになってから、自分で旅行するときにも気にいった山河、農村風景、古民家等をスケッチしているときは至福のときだと感じています。またスケッチをした景色が鮮明に頭に残るのも楽しいものです。

絵の雑誌のなかで、絵を描くことは「個であり孤である」ということを言っていた作家がおられたが、そういう一面もあるのかなと思います。いずれにしてもスケッチが旅をさらに充実したものにしてくれます。

旅といえば、勤めているときからいわゆるワンボックスカーで旅行していましたが、いつの頃か道の駅が整備されてきて、それを利用することにより１週間程度の旅をするようになりました。旅のコストを安く抑えるために道の駅をフルに利用しています。こういう用途にはキャンピングカーが適していますが、年金生活者には高くて買えません。買い物、ドライブおよび宿泊等につき、１台の車で多目的に使えるものが必要です。今、使っているワンボックスカーはごく普通の車ですが、若干気に入っている部分もありますので簡単にかきます。

３列目の場所に椅子がなく、代わりに椅子の高さのレベルにプラスチックの板が３枚ひいてあります。２列目の椅子の背もたれを前倒しにすることにより、大人２人分の寝られるような板状の平坦なスペースができます。また、３枚のプラスチックの板のうち１枚に折りたたみの足がついているのでテーブルにすることもでき、３枚の板の下は旅行の荷物を入れられるスペースがありますので収納に便利です。

スケッチ旅行のことですが、目的地までの途中においても、車を走らせながらスケッチポイントがないかと思っていますが、最近は道が非常に整備されているために市街地をバイパスする道に誘導されるようになっており、そのため特色のある地方の市街地を見落としてしまうことがかなりあるのではないかと思うことがあります。(用もないのに車が入られるのは迷惑な話かも)

私は気が小さいので、スケッチをしているときに通りがかりの人に見られたり、話しかけられたりすると緊張したりします。内心、早く行ってくれないかなーと思ったりしますが、最近ではできるだけ調子を合わせるようにしています。

昨年11月に福井方面を旅し、小浜市の明通寺付近でたまたま見つけた農家の茅葺屋根が印象的でしたので、スケッチをし、あとでＦ50号の絵にしてみました。

スケッチをするとき女房は絵を描きませんので、一人旅ですが、ときどきは女房を連れて東北方面の温泉めぐりも良いものだと思っています。

日本人の美意識　窪田四郎

奈良薬師寺の三重の塔は釘一本使わず木造で作られ、自然の中に調和し建っています。この塔は第二室戸台風の際も瓦一つ飛ぶことなく、大地にしっかり腰を据えて建っていました。その理由は外から見えませんが、内側に太い心柱が建っていて強度の地震に耐えられるようになっていたからだといわれています。

すなわちこの三重の塔に象徴されるように、日本の伝統美は、忍ぶ心の美しさ、これが日本人の美意識の特徴といわれています。

このことは、建築のみならず、絵画、茶道、華道、陶芸、文学等の世界においても優れたものは、日本の美意識の特徴が表れていると思います。

戦後65年が過ぎ、平和が続き、絵画の世界も、日本にいて世界の名作を鑑賞することが出来るようになりました。

素晴らしい絵は、その絵を描いた時代の背景、作者の人生観、その時の感情等その絵に潜む真実は何か、を考えて、それを自己の脳裏に投影することが重要です。

そして日本人の美意識をもってその物体の真実に迫っていく忍耐力が必要です。

日本は今や、女性が86.44歳と世界一の長寿国となり、男性も79.59歳と世界5位の長寿国となっています。

この長寿国の日本において、“老人力”をいかに活かしていくかが問題です。

特に、わたしは、戦中派として戦争時に青春を生きてきた上、平和で自由な飽食の生活を送ることができた者として、戦争の悲惨さや敗戦後混乱の社会を知らない後輩らのために、自らの生きた証を後世に伝えたいと思っています。

それをどのような形で実現するのかは課題ですが、特に、絵画の中にその残像を描き込み伝えていくには、どうしたらよいか、考えて生きていると、若い生命力が湧いてきて、血潮に燃える“老人力”として限りない活力を与えてくれているように思います。

わたしは、かねがね新日美会員の皆様が絵画においてその道を究めんとして生きておられ、それぞれ素晴らしい人生を歩んでおられることに尊敬の念を抱いております。

わたくしも皆様の驥尾(きび)に接して生きていきたいと念願していますので、どうかよろしくお願いします。

前号の１ページ総会に関する記事中、議長久保田委員と記載しましたが、正しくは“窪田委員“でしたので訂正してお詫びします。